

連載「誰も書かなかったGIS」第1回

連載の開始にあたりまず心の準備を...

(株) エヌ・シー・エム 代表取締役社長 柳田聡 (やなぎだ さとし)

1982年東京大学工学部土木工学科卒業。同大学院修士，博士課程を経て1985年より現職。工学博士。専門は画像処理及び地理情報システム。

1. 連載へのお誘い

1998年1月某日、オフィスの電話が鳴った。電話に出てみると、昔お世話になった(元)統計情報研究開発センターのA氏からの電話であった。A氏は「昨年柳田さんに書いて頂いた、機関紙エストレーラへの掲載記事がたいへん好評で...」(実は、筆者はちょっとした御縁で、エストレーラへの記事の執筆を依頼され、駄文を1つ掲載させて頂いた経緯がある。)と、やや話しくそくに切り出された。「うーん、『好評で。』と来たかあ。そうか、あの記事をどこか別の文書に転載したいという依頼だな。なんだか話しくそくにしていらっしゃるけど、そんなに遠慮なさる必要ないのに。」と私なりに忙しく頭を働かせた。

しかし、次の瞬間A氏から発せられた言葉は、私の予想を覆すものであった。「実は、1年間の記事の連載をお願いしたいのですが?」と予想外のパンチが飛んで来たのである。「ゲッ。1年の連載なんてやったことがないなあ。仕事は相変わらず忙しいし、第一私には1年も記事を書くネタがあるのだろうか。たとえネタがあったとしても、皆さんが興味を持ってないネタだったら申し訳ないなあ。」と、また私なりに忙しく頭を働かせた。

しかしこういう御依頼をお断りした場合の問題点も、私は重々承知しているつもりである。いざ私の方から何か人様をお願いしようとした時、(実は情報処理の分野で仕事をしていると、近年の新しい技術を全て自社だけでカバーすることは不可能で、しばしば他社の方、他の分野の方の手助けを得ないと仕事を成し遂げられないこともまた事実である。)お願い出来る範囲が狭まってしまうという危険性がある。別に打算だけで執筆を引き受けるつもりは無いが、折角声をかけて下さったのにお断りするのは申し訳ない気がした。そこで幾つかの付帯条件をつけさせては頂いたものの、基本的には1年の連載をお引き受けすることと相成った。

2. 自己紹介

連載の開始に当たり、月並ではあるが、自己紹介するのが礼儀だと思うので簡単に自分自身の経歴を御説明したい。

大学では土木工学を専攻した。友人の多くは土木行政に携わったり、或いは構造物の設計・技術解析等に取り組んでいる。その中で私はやや異質の存在になりつつある。大学時代は健康を害したこともあり、計算機がどちらかと言えば不得意で、その私が今ではソフト会社の社長になっているのだから、人生など分からないものである。

専門は衛星画像処理が少々、GIS(地理情報システム)が少々、最近ではマルチメディアコンテンツのオーサリングを少々かじっている。何でも屋と言えば聞こえがいいが、今一つ専門性が無いのではないかと、最近自分自身で少々強迫観念を感じている。

取り柄と言えば、他人の言うことを鵜呑みにしないという、あまのじゃく的性格を持っていることであろうか。このことが場合によっては吉ともなり、凶ともなる。

さて、この様な属性を持った私は一体何を書けば良いのだろう。

3. 本誌を読んで

先ず手始めに、手元にあったエストレラを何冊か読み始めた。一読して気が付くことは、実に様々な分野の方が様々なことを執筆なさっているということだ。目の覚める様な綺麗な女性から、いかにも堅くてまじめそうな役所の方に至るまで、多士済々が揃っていらっしゃり話題もワイン、旅行記、技術的報告等広い範囲に渡っている。「これなら何を書いても良さそうだ。」と取り敢えず安心する。

もう一つ気付いたのは、GIS に色々な分野の方が注目していらっしゃるということだ。この1年に限って見れば、特にGISに関する記事が多かった様な気がする。このことはGISで生計を立てている私にとっては、嬉しい反面自分も頑張らねばおいてかれてしまうという焦りも感じさせられた。

特に失礼ながらアマチュアの方が、1年に渡ってGISのプログラミングを連載なさったのには、度肝を抜かれた。先ず、自分でプログラムまでお書きになったということが非常に偉いと思うし、且つ1年間よく続けられたと思う。そこまで具体的にGISに取り組みされた為、私自身も色々参考になることが多かった。

例えば第1回目の連載であったと思うが、暗い部屋の中でグラスを傾けながら、PCが画面上にゆっくりとドットを打っていくのを眺める様子が描写されており、落ち着いた良い雰囲気を感じられた。この様なロマン溢れるやり方でGISを楽しまれているというのは、私にとっては新鮮な驚きであり、日夜「描画スピードを上げる為にはどうすればいいんだ。」と悩んでいる身にとっては、非常に羨ましい世界であった。

それ以外でも「見えないものは無いものと同じだ。」とか、「あるがままのファイルを読み込むのがビューアーである。」等、数々の箴言もちりばめられており非常に参考になった。なまじっか GIS の世界で、先入観の垢にまみれた技術者よりも、視点が斬新でありその意味で非常に読んでいて参考になった。

白状すると実はこの記事を読みながら、「よし！アマチュア（失礼！）に負けてなるものか。俺も書いてやる。」とやる気が半分出て来た。さて、後の半分のやる気を完成する為には、何を書くべきか決めなければいけない。

4. 問題意識：全てが分からないGIS

幸いなことに GIS に関しては、ここのところ数年私なりに暖めて来た問題意識がある。「恐らく自分が考えている様なこと、やっている様なことは多くの場合マイナーな分野であり、（技術的に非常に狭い分野であり）余り誰も気にしていないかもしれない。或いは、もしかしたら間違っているのかもしれない。」そういう恐れを抱きつつ、「でも記録しなければいつかは散逸してしまう。」こう考えたのが、書こうというやる気が出て来たもう一つの要因である。

具体的には以下の点で、十数年来GISに取り組んではいるものの、未だにGISが分からないでいる。

GISの定義がよく分からない。

図面管理，地図情報システム，AM/FM，CAD，施設管理等の分野とどう違うのだろうか。その違いの明確な定義は出来るのだろうか。

例えば、私が友人にビジネスランチの為の、レストランの場所の地図をメールに挿入して送ったら、それはGISであろうか。多分多くの人是否と言うであろう。しかし、オフィスから一番近くて且つジャンルが日本蕎麦という条件で、検索をかけた結果をメールで送信するとすると、これはGISでいうところの空間，属性検索の技術に該当して来る。果たしてこれは、GISでないとと言えるのだろうか。

GISのデータ構造がよく分からない。

私分からないGISのデータ構造というのは、別に特別、複雑な構造という訳ではない。ファイル、レイヤー、テーブル、図形と属性のリンク、位相構造とか、いわゆるGISの基本的な概念であると言われている事項ですらよく分からない。

GIS製品の分類の仕方がよく分からない。

こういう商売をしていると、「どのGIS製品が良いのか。」とよく尋ねられる。この質問に答えにくい1つの理由として、弊社自身がGISのベンダーであるということもあり、従って、他社の製品の悪口も言いにくいし、かといって自社の製品をおとしめて他社の製品を宣伝する訳にもいかない。

そういう問題はあるものの、たとえそれを無視したとしても、実は GIS 製品の各々の長所、短所が上手くまとめられない。どういう観点で、各々の製品を評価、分類すれば一番公平、且つ客観的なのだろうか。

GIS の導入効果及び効果の計測手法がよく分からない。

これまたこういう分野で仕事をしていると、しばしば「GIS を導入した場合に達成出来る経済効果を特に、金銭に置き換えて算出したい。そうでないと、予算を出す側を説得出来ないのだが、どうすれば良いのだろうか。」という相談を受ける。

こういった問題に対して、やれ「生産性の向上。」だとか、「より正確な意志決定が、投資の効率化につながる。」とか、色々歌い文句は考え付くのだが、それを計量する方法となるととんと検討が付かない。

それは計量経済学の分野であって、私の分野ではないという開き直りの言葉が頭の片隅にちらちらしつつも、この様な問題にもそれなりに対処しなければいけないという焦りが心の中に生まれる。

GIS に関しては、もちろん上記以外にもたくさん問題があるのだが、取り敢えず以上の様な問題で悩んでいる。この様な問題に関して、私自身の能力の及ぶ限りではあるが、本連載の中で考えていき、私なりの考えを示すと同時に、何らかの御意見でも伺えれば有り難いと考えている。

5. 今後の指針

本来であればここで1年間のスケジュール表を書きたいのだが、まだそこまで頭の中が煮詰っていないので、取り敢えずは御勘弁頂きたい。ここでは、執筆における基本方針めいたものを掲げることに留めておきたい。

気楽に書かせて下さい。

正直言って、堅苦しい文章を書くのは苦手である。こちらの勝手な言い分を言わせて頂けるならば、仕事の息抜きに書く様なスタンスでいたいと思っている。従って、気楽に書かせて頂けると有り難い。

私でないと書かない内容を書かせて下さい。

私でないと書かない内容を書きたい。これは裏返すと、私以外の人間は気にも留めていない様な狭い分野のこと、客観性より主観性に重きを置いた内容、更に場合によっては、誤っていることさえ書くかもしれないということである。

しかし GIS に関しては、最近専門の方による著作がかなり出揃って来た様に思う。従って、他の方と同じことを書いても仕方ないので、私でないと書かない様な内容を心掛けるつもりである。

自分の問題意識に添った内容を書かせて下さい。

これは前述した項目ともダブルなのであるが、自分の問題意識に沿った内容でないと書きづらいうという側面がある。自分の問題意識に沿っているからこそ気楽に書けるのである。

正直な事実、気持ちを告白させて下さい。

文章において一番何が面白いかというと、多少偏向、バイアスがかかっているようが、本音が出ている文章が一番楽しい。

典型的な例は、インターネット上で個人が出しているホームページである。ホームページは自分の庭であり、その意味で自分の主張を強く出している例が多く見られる。そういうページはその正当性はともかく、読んでいて非常に面白いものがある。

ホームページとエストレラを同一視するのは、非常に申し訳ない気もするが、出来るだけ正直な事実なり気持ちなりを記述したいと思っている。

出来るだけ一回ずつの読み切りを。

1年の連載をするに当たり多分読者の方が、毎回毎回読んで下さることを期待してはいけないと思っている。何せ、私自身がエストレラを頂いても、この連載が始まる以前は、ほとんど読んではいなかったのだから。

従って、出来るだけ1回ずつの読み切りで、その回だけ読んでもある程度、内容が分かる様に心掛けたいと思っている。但し、やむなく複数回で一単位のお話になる可能性があることは、予めお詫びしておく。

以上の様な基本方針に従って執筆していき、1年の最後に何か皆さんなりのGIS像の構築のお手伝いが出来たり、私の問題意識がある程度ご理解頂ければ、筆者としてこれに勝る喜びは無い。「可能な範囲でお付き合い頂けると、有り難い。」という願いをして、第一回目の筆を置くことにする。